

ヒト回虫と潰瘍性大腸炎(UC)に関する研究(2)
- ヒト回虫におけるMucin12の局在部位 -

林 猪都子 神田 靖士 吉留 厚子 石田 高明 西山 利正
関西医科大学 医学部 公衆衛生学

【目的】潰瘍性大腸炎の患者血清中に、ヒト回虫に対する抗体が産生されることが知られている。第43回大会では、ヒト回虫とヒト大腸粘膜の共通抗原性を遺伝子的に解析した結果、ヒト大腸cDNA中のtransmembrane mucin12、similar to actin、beta-casein-like-proteinと高い相同性を有することを発表した。中でも潰瘍性大腸炎患者の血清中にanti-mucin抗体が上昇するという報告があり、transmembrane mucin12は潰瘍性大腸炎との関連性があることが示唆された。Transmembrane mucin12はmucin3と相同性が高く、mucin3は小腸に豊富に存在しており、ヒト回虫成虫が小腸に寄生し、好適な環境であることが推測された。そこで、今回、anti-mucinなどの抗体を用いて、ヒト回虫における局在部位を検討する目的で免疫染色を行い、免疫化学的特性の検討を行ったので報告する。

【方法および結果】ヒト回虫の凍結切片を作成し、1次抗体にmonoclonal anti-human gastric mucin、2次抗体にFITC-anti mouse IgGを使用して免疫染色を行った。その結果、ヒト回虫の側線と花房状器官に特異的なシグナルが観察された。また、同様にDABによる染色を行った結果、局在部位は同じ部位であったことから、このシグナルが内在性の蛍光物質の影響によるものではないことを確認した。これらの結果よりmucinと共通抗原性のある物質が回虫の花房状器官から側線にかけて局在していることが推測された。また、transmembrane mucin12のORFをPCRにより増幅しクローニングした後に、リコンビナントタンパクとして発現させた。このmucin12を精製し、さらなる免疫学的特性の検討を行う予定である。

Study of *Ascaris* and ulcerative colitis part 2 : localization of mucin 12 on *Ascaris lumbricoides hominis*

ITOKO HAYASHI

Dept of Public Health, Kansai Med. University, Osaka, Japan